

# 川端康成「東海道」論

——〈文献引用〉を手がかりに——

丸山 絵梨 奈

## はじめに

川端康成の「東海道」は、「満洲日日新聞」紙上で一九四三年（昭和一八年、奥付は康徳一〇年）七月二〇日から一〇月三十一日まで連載された作品である。初収は作者の没後に刊行された『天授の子』（昭和五〇年六月、新潮社）であり、本書巻末で川端香男里が「覚書」として述べたところによると、紙上で連載は第四八回で終了したが、原稿は第五四回分まで執筆され、満洲へ送られ、それ以降行方不明となった。しかし、川端の妻・秀子の手による原稿の写しが残されていたおかげで、第四九回分が欠けてはいるが、それらを収録することが可能であったという。

先行研究において、本作を論の俎上にのせる際には、後続作品に及ぼした影響に焦点が当たることが多い<sup>1)</sup>。これは中期以降の川端康成文学において、小説と伝統文化、あるいは日本観との密接な関係が、研究の主たる関心領域となってきたためである<sup>2)</sup>。

しかし、川端と〈伝統〉あるいは〈日本〉との関係をめぐって蓄

積されてきたこれらの研究のなかで、意外に見落とされているのが、川端がみずからの小説の創作基盤とした、文献についての検討であろう。「東海道」には主人公である植田健吉が、娘である絹子に古典の知識を教授する際に、古い文献や当時の研究からの引用を、膨大な量で行っているという特徴がある。一方、昭和一八年一月一日附の片岡鉄兵宛の書簡に「東海道ではかなり本を読んで、いい癖がついた」と書き、また昭和一八年二月一日附の藤田圭雄宛の書簡に「歴史古典の読書癖つきて本代に困却の程」とも漏らした川端の読書量は、相当なレベルに達していた。「東海道」はいわば、戦中の川端の読書体験が文献引用という形で、小説の方法として表れている可能性がある作品なのである。

そこで、まずは、「東海道」作中の典拠を可能な限り洗い出し、作品の本文と比較することによって、文献引用がいかに本作の根底を支えているのかを明らかにする。それがどのように作中に取り込まれているのかを探る作業に徹底的にこだわって、川端の読書体験の具象相を明らかにしたい。

その上で、川端が当時小説をどのようなものとして構想していた

のかを考えることが、本研究の目的である。

一

「東海道」は文学史家である植田建吉が、娘である絹子を相手に、主として平安末期、室町、鎌倉時代の古典の知識を教授するという構成になっており、その教授の際に、古い文献や当時の研究からの引用・参考が、盛んになされているという際立った特徴がある。

植田が絹子に最初に教授するのは、小野小町と菅原孝標女の二名についてである。植田は小町について、以下のように評価している。

しかし、小町の時代には、まだ日本語の文章を書く者がなかつたんだよ。国文は文章と思はれてなかつたんだ。文章といふと、漢文のことだった。(万葉集)を忘れたやうに、和歌は衰へてしまつて、漢詩が全盛だった。勅撰漢詩集の詩人連中も、名前まで唐の詩人の真似がしたくて、自分の姓名の字をわざとけつて、三字名をはやらせてゐたんだよ。さういふ時に生れて、日本の新しい歌を歌ひ出したのが、小町や業平なんだからね。これがやがて、(古今集)の時代になり、(源氏物語)の時代になるんだよ。小町や業平は、民族の自覚、王朝文化の先覚者なんだ。

このように、植田は小町を「民族の自覚、王朝文化の先覚者」として讚える一方で、孝標女を以下のように評価している。

「更級日記」は思ひ出の美しさである。過去を悔いることによつて、却つて過去をいきいきと夢みかへしたかのやうな、書きぶりである。

「枕の草子」などのやうに、その日をその日に歌ふ栄華を、孝標女は見ることが出来なかつた。

十三の少女が、物語の都にあこがれて来ると、もうその花の盛りは過ぎてあて、その凋落を見る、端役を振りあてられたのだつた。

一条天皇の御代に、孝標女も生れはしたが、宮廷女流文学の盛りに生きるには、三十年か五十年おそかつた。彼女が二十の年に、藤原道長は六十二で死んだ。

しかし、孝標女がいい時に生れ合せたとしても、宮廷に才華を競ふといふ人柄ではない。

幼い時は、その宮廷の物語にあこがれ、長じては、その宮廷の思ひ出にあこがれるのが、やはり適役であつたらう。

植田は、小町を日本文化の枠組みで提示するのに対し、孝標女のこととは、宮廷女流文学の全盛期に憧れている「端役」だと述べている。これらのことから、一見したところでは、植田は小町と比べて、孝標女をさほど評価していないように思われる。しかしながら、植田は、孝標女を小町より劣つた人物と見なしているわけではない。むしろ、孝標女という「端役」を、話題の中心に据えて語ることで、孝標女を文化の創始者である小町と、同等に評価しようと試みてい

るように思われるのである。

この理由は、植田が孝標女と小町とを比較する際に使用する、「夢」という言葉に注目することで、見えてくるように思われる。では、植田は、孝標女をどのような存在と見なしているのだろうか。例えば、「更級日記」について語り始める植田の言葉は、次のようなものである。

東路とうろの道のはてよりも、なほ奥の上総の片田舎で、この子は、物語といふものに、あこがれを持つやうになつて、

「——等身に薬師仏をつくりて、手洗ひなどして、人まにみそかに入りつつ（京にとくあげ給ひて、物語の多く候ふなる、あるかぎり見せたまへ）と、身をすてて、額ぬかをつき祈り申すほどに、十三になる年、のぼらむとて、九月三日にかどでして……。」

といふ、書き出しのところを、植田は読んで聞かせた。

植田は、孝標女がまずは、「物語」に「あこがれ」ていることに言及している。この箇所以外にも、孝標女が「物語りもとめて見せよ、物語りもとめて見せよ」と「母にせがむ」場面が引用されている。これらのことから、植田にとつて、「物語」に「あこがれを持つ」孝標女像が、重要であることがうかがえる。また、植田は、小町と孝標女を「夢」の「発見者」としても評価している。

小町と孝標女とは、日本の文学に夢を発見した人ともいふ。

植田の孝標女に対する評価は、池田亀鑑『宮廷女流日記文学』（昭和二年二月、至文堂）の、次の部分に依拠していると考えられる。

即ち蜻蛉日記に於ては、夢は、何等内面的な意義をもたない偶然的なものである。この夢が、必然的な意味をもつて意識の上にのぼつて来るのは、源氏をへてきた更級日記からである。それゆゑに、更級日記の作者は、日本文学の歴史に於て、最初に夢を見出した女性であらう。

（池田亀鑑『宮廷女流日記文学』）

池田は、「夢」という視点から、「蜻蛉日記」の道綱母と、「更級日記」の孝標女とを比較している。その際、「内面的な意義」の有無から、孝標女を高く評価し、「最初に夢を見出した女性」といった、文学史的意義を見出しもいる。「東海道」にもまた、「蜻蛉日記」と「更級日記」とを比較している箇所がある。

しかし孝標女の夢は、物語の世界の夢を夢みたので、いはば夢を夢みた人であつた。

道綱母と孝標女だけが、五十を過ぎてから自叙伝を書けたといふことは、二人が妻として母として、地味にたしかに生きたやうな人柄のあらはれだが、「更級日記」には「蜻蛉日記」のやうな身もだえがない。

ところが生涯夢幻の中にあつて、現実を失つてゐた故に、かへ

つてこの孝標女ほど、現実な生活を送った人はいなかった。

植田は、道綱母と孝標女とが「五十を過ぎてから自叙伝を書けた」理由として、「二人が妻として母として、地味に確かに生きたやうな人柄」を指摘してみせるが、ただ、孝標女にだけは「身もだえ」するものを感じると語る。その上で、孝標女を「生涯夢幻の中」において、「現実」を失っていたからこそ、かえって「現実な生活」を送れたというのだが、この逆説的な孝標女理解の前提は、次のような、池田亀鑑『宮廷女流日記文学』の説に、依拠したものと考えられる。

更級日記のこの絶対主観的特質は、和泉式部に見られるやうな、客観に対立し、客観から切り離れた消極的な主観の象牙の塔ではなくて、むしろ、あらゆる客観を、創造し、統一すべき最高絶対な主観であることである。それ故に、その世界は、とりもなほさず、詩の中の詩の世界である。物語の中の物語の世界である。夢の中の夢の世界である。そこには「美」への心からなる陶醉があり、虚無への無限の恍惚があるべき筈である。

(略)

しかしながら、更級日記に於ける夢幻の世界は、彼女に於て、決して現実ならぬ空虚の世界ではない。最も充実した、しかも、最も真実なるべき世界である。そこは、現実以上に現実らしい世界である。彼女に於ては、自然は芸術を模倣するものである。矛盾と不合理の穢土のやうな現実の世界は、彼女に於ては、それ自身、かへつて美しき「芸術の宮殿」できさへもある。そこに、

実生活の夢幻化があり、理想化があり、魔化があると思はれるのである。

(池田亀鑑『宮廷女流日記文学』)

つまり、池田は、孝標女の「夢幻の世界」とは、「真実なるべき世界」であり、それゆえに「現実以上に現実らしい世界」だということにするに、孝標女によつて「夢幻化」した「実生活」そのものが、「芸術」や「理想」であり、「魔化」されたものだといふのである。川端は、国文学者である池田の言説を、まさに国文学者として造形した植田に「引用」させることで、「東海道」を創作していく。

しかしながら、小町と孝標女とを結び付けるのは、植田独自の観点であるといえる。孝標女は植田によつて、小町と対等、あるいは、それ以上のものとして、押し上げられているように見えてくるのである。そもそも植田は、小町の「夢」を以下のように評価していた。

「あはれてふことこそうたて世の中を思ひはなれぬほだしなりけり」

と小野小町もうたつたが、まだ小町の夢は、現実を夢みたもので、いはば夢を生きた人であった。

植田の小町の「夢」に対する評価は、前田善子『小野小町』(昭和十八年六月、三省堂)の、次の部分と類似している。

小町の場合について見るに、その生来の芸術家的天分は、現

实际的にされ得ない悲恋の境遇をして、現実を離れ理想の世界の  
思慕としての夢に生かす事によつて、自らを救はうとしてゐる  
のであつて、彼女の恋愛歌の中、数多の夢の歌が特に優れてゐ  
るのを見ても、うなづけるであらう。この「夢見る心」といふ  
よりも更に「夢を求める心」は彼女の精神生活の中核をなして  
をり、ここに浪漫的な精神が育まれて行つたと見られるのであ  
る。

(中略)

小町の世界観の中に、美しく成長して行つた古代浪漫精神は、  
彼女の生活に於ては、夢を思慕する形をとつてあらはれた。

(前田善子『小野小町』)

前田は、小町の「古代浪漫精神」が、その「生活」において、「夢  
を思慕する形」となつて現れたと述べている。ここにおいて、植田  
が、小町と孝標女を「夢」を、媒介に対比したことの根拠を知るこ  
とができ、それと同時に、植田独自の指摘を知ることでもできる。つ  
まり小町の「夢」が、「現実」に叶わぬ「悲恋」ゆえに夢見られた「理  
想」、すなわち、「現在」であることに対して、孝標女の「夢」への  
憧れが、「思ひ出」や「過去」として、「夢みかえしたかのやうな」  
と表現されている点である。孝標女と小町との「夢」の内実に、こ  
のような差異が生じた理由は何であろうか。それを知るためにも、  
植田がこうした孝標女像を見出す背景にあるものを、さらに当時の  
国文学研究に関する文献から見出してみたい。

## 二

孝標女を物語世界の「夢」に憧れた人物とする見方は、植田独自  
の観点というわけではなく、近代における初期の段階の「更級日記」  
研究である、藤岡作太郎『国文学全史 平安朝編』（明治三八年一〇  
月、開成社）において既に認められる。

更級日記を読み、著者の性行を察するに、殊に著しく覚ゆ  
るは、その幻想に耽溺せしこと是なり。幼きより昔物語を好み、  
上総にありて光源氏の事など、所々、人の話に聞きて、「等身に  
薬師仏を作りて、手洗ひなどして、一間にみそかに入りつゝ、  
京に疾く上せたまひて、物語の多く侍るなる、ある限見せたま  
へと、身を捨てて額をつき祈り申」したりき。

(藤岡作太郎『国文学全史 平安朝編』)

植田の孝標女への評価の根本には、孝標女に対するこのような認  
識があるのである。注目すべきは、植田が物語の「夢」に耽溺した  
文学者という孝標像を評価している点である。

川端は、植田に孝標女について評価させる際、孝標女の物語への  
憧憬に基づく「夢」の要素に着目し、当時の研究もそうした要素を  
含む箇所を積極的に参考にしていた。

それでは、川端が孝標女の「夢」に耽溺する文学者としての一面  
を、殊更強調してみせた理由は何であろうか。

当時の「更級日記」研究において、孝標女の「夢」への耽溺と並んで、頻繁に指摘されていることがある。それは孝標女が、平安末期という時代を象徴する文学者であるということである。前掲の藤岡作太郎『国文学全史 平安朝編』において、以下の所見が述べられている。

更科日記が現実の社会に興味を感じざるは、著者が個人的性格の然らしめたるは固よりなりといへども、また一面は当代の思潮の然らしめたるものにして、著者は離れても離れられざるこの思潮を代表したるものなるが如し。(略)かくして当時の公衆は現実満足せずして、ひたすらに過去を憧憬せり。清紫の二女をはじめ先代の人は進んで世に交はり、世を見て、世を写せり。今やあらず、現在を傾衰の時と見、その時に遇ひたる自己に対する信念も厚からず、今を捨てて古を恋ひ、実境に求めずして粉本に求む。こゝにおいてか倣古模擬の風は生じぬ。これ既に狭衣、浜松の証するところ、更科日記の著者またこの時風を一身に代表するものにあらずや。

(藤岡作太郎『国文学全史 平安朝編』)

藤岡の、孝標女が平安末期という、過去を憧憬した時代を象徴する存在であるとする所見は、久松潜一「日記文学と女性」(藤村作『日本文学論 第一期』昭和二年一月、中興館)にも引き継がれている。

かくて現実の世界から文学の世界に憧憬れ、更に宗教的世界に入ったのが著者の心境の展開であつたかと思はれる。そこには現実の世界から、よりよきものへの創造に対する純粹なる思念が見られると思ふ。而してこれは一人の女性の心境の推移であるが、これを一面から見ると、平安時代末期の心境を示して居るともいはれると思ふ。

(久松潜一「日記文学と女性」)

久松の、「平安時代末期の心境を示して居る」孝標女の「心境の展開」が、「現実の世界から、よりよきものへの創造に対する純粹なる思念」からもたらされたものであるとする所見は、これ以降の研究において否定されることになる。保田與重郎「更級日記」(『国語・国文』星野書店 昭和一〇年八月、後「コギト」第四号(昭和一年一月発行)に再掲載)を見てみよう。

更級の作者も少女時代から老年に及ぶ歴史にかりて、このわが国史上に美しいエッセイに、人間のありのままの姿を描き残してゐる。人が空想して現実を考へたり、心の現実的發展や進歩を考へつゝある時期の記録でない。精神の段階的な成長が書かれたのでもなく、この時代の精神の典型的な様態が描かれたものである。発展したり進歩したり、今日は昨日より進んでゐる心の姿を眺めたものでなく、それらの現実への空想の地もなく天もなくなつた今日の様態を描いたままであつた。

(保田與重郎「更級日記」)

「更級日記」を「今日は昨日より進んでゐる心の姿を眺めたものでなく、それらの現実への空想の地もなく天もなくつた今日の様態を描いた」作品であるとする、保田の時代観は、久松より藤岡のそれに近いといえるであろう。両者とも平安末期を文化の衰退期として認識し、かつての王朝の栄華をひたすらに憧憬した時代だと認識しているのである。こうした所見はやがて、佐山済『女流日記』（昭和一五年二月、日本評論社）のように、「更級日記」に「全体を押し包む暗さかなしきといふ」「作品のうへに映つた時代の影」を読み取らせるのである。

もともと紫式部日記と、この日記との間にはそのかかれたうへではほぼ五十年あまりの隔たりを持つてゐる。この時代の性格は、非常な変動崩壊の時期なのであるからわづかに五十年といつても、そこにはかなりのひらきや違ひが出て来るとおもふ。紫式部日記にはまだ王朝といふ時代の若々しさがみられ、その完璧の壮麗さといふものがみられるが、更級になると全体を押し包む暗さかなしきといふものはどうしても否みがたいものがある。それ作品のうへに映つた時代の影である。

（佐山済『女流日記』）

孝標女を、平安末期の象徴として見るこれらの研究の所見を見ると、「東海道」における植田の孝標女像に、単純に物語世界の「夢」を憧憬した人物というだけではない、新たな価値を見出すことがで

きる。

川端は、文化衰退期としての平安末期という、時代の象徴としての孝標女を存在を念頭に、孝標女の物語世界の「夢」への憧憬を、「東海道」作中でことさら強調してみせることで、平安末期という時代を、かつての王朝の「夢」が物語、つまりは、言葉でのみ保存・継承される時代として、描こうとしたのではないだろうか。

そして、この言葉でのみ保存・継承される文化の在り方こそ、「東海道」の主たる題材である中世を記述する際、最も鮮明に光が当てられるものなのである。

### 三

こうした川端の試みは、室町時代の代表的な文化人の一人である三条西実隆と、天才連歌師の宗祇との関係において、より明瞭な輪郭を有して立ち現れてくる。

川端は植田に、「連歌は宗祇に極まつた」と宗祇の天才性を評価させる一方、宗祇が残した数々の功績について、具体的に語らせることはしない。植田同様「連歌の発達は宗祇が出たことによつて、最も頂点に達した」としている、吉澤義則『室町文学史』（昭和一一年一二月、東京堂）において言及された、水無瀬三吟百韻と延徳二年の湯山における百韻において、宗祇が連歌にもたらした「連歌が芸術的意味を有するに至つた」革新についても、植田は一切言及していないのである。

各句は文法的には何等の連絡関係を有しないが、第一句は第二句と対立する時にその二句の調和によつて一つの詩境を創造する。これが芸術的の価値の大なる点で従来の連歌には殆ど見なかつたものである。すなはち従来のは附け方の巧妙なものを残しておいたにすぎなかつた。且つ句相互の間に連歌があつた。例へば

吉野山二たび春になりにけり

年の内より年を迎へて（後鳥羽院）

の如くである。

然るに宗祇以後は、各句は相互に文法的の關係はないけれども二句の対立する時に連想の調和配合が自ら一詩境を構成する。随つて連想に制限が加へられない為に余韻たるものを生じた。

（吉澤義則『室町文学史』）

加えて、重要なのは、植田が宗祇について語る際に、必ず実隆との關係を通して語ることである。「東海道」作中で、実隆と宗祇について語られた箇所は、主として、先述した原勝郎『東山時代に於ける一縉紳の生活』を参考にしていると考えられる。以下の「東海道」作中からの引用と、『東山時代に於ける一縉紳の生活』の参考箇所とを見れば、作中での宗祇は、実隆との關係を通して語られていることがわかる。

原勝郎『東山時代に於ける一縉紳の生活』（昭和一六年四月、創元社）からの作中への引用として、以下のものが指摘できる。

講義が終るか終らぬうちに、宗祇はあわただしく、「古今集聞書」や切紙以下の相伝のものを、悉く函に納め、封をして、都の実隆に送つた。（略）もつとも、「古今集聞書」などは、かねて実朝に相伝のはずで、晩年の宗祇が遠国の旅に出る時には、これらの大切な秘伝書を一纏めにして、実隆に預けてゆく例であつた。（略）この「古今伝授」の秘物一切が、越後から到来すると、実隆はまことに道の冥加と自愛して、ここに秘伝を完全に承けついでわけである。

（川端康成「東海道」）

斯く席暖まる違もなく京田舎を出入した宗祇は、晩年遠国下向の時となると、其平素最も大切にしている古今集聞書以下、和歌、左伝、抄物等を一合の荷に纏め、人丸の影像と共に之を、旅行に際して実隆に預けることとした。（略）宗祇が此等のものを、旅行に際して実隆に預けることとしたと云ふのは、単に不在中の紛失を恐れた為めのみではない。実は長享二年宗祇の北国行の際実隆との間に約束が結ばれ、老体でもあり、遠国へ下向すると再会は期し難い事であるから、若し旅先きで万一の事があり帰京叶はぬ仕儀となつたならば、聴書等を実隆に附与しようとして云つたのである。従つて之を実隆に預けると云ふのは、万一の際其儘留め置くやうにとの意味なのである。果して宗祇は其歿する前年即ち文龜元年の九月に、古今集聞書切紙以下相伝の儀悉く函に納め封を施して実隆の許へ送り届けた。実隆之

を記して、誠以道之冥加也、尤所深秘也と云つて居る。

(原勝郎『東山時代に於ける一縉紳の生活』)

以上のことから、推測できるのは、植田に宗祇について語らせることで、宗祇自身についてというより、むしろ、実隆について語らせようとしているのではないかと、作品の裏側に隠された川端の意図である。川端は、優れた芸術家である宗祇の背後に隠れた川端の文化活動の支援者としての実隆の存在を、植田に宗祇について語らせることにより、浮き彫りにしようとしているのである。

こうした川端の意図は、植田に將軍足利義尚の死に対する、実隆と宗祇の反応の違いを、以下のように評価させているところにも表れている。植田は、將軍足利義尚の死に対する、実隆と宗祇の反応の違いを、宗祇が「戦国に古典の道を貫いた一筋の誠実」を持つていたのに対し、実隆は「幕府に媚び、武家に縋り、無為無力の公家は、波のまにまにあきらめて、今日から見ると、むしろ意外にのんきなもので、実隆も世の習ひを出なかつた」「宗祇にくらべると、実隆はよほど現世的な楽道家だつた」と評価している。この植田の評価は、ともすれば、宗祇と比較して実隆が劣つていると見なしているかのようと思われるが、必ずしもそうではない。植田は、一時代の文化の頂点を極めた天才宗祇に対する、文化の伝播者としての実隆の存在を語りたかつたがために、あえて実隆をこのように評価したのではないかと考えられるのである。

文化の伝播者としての実隆像は、一条兼良との比較においても語られている。

十五歳で正二位権大納言、二十歳で内大臣、二十三歳で右大臣といふやうな、一条家の関白兼良にくらべて、西三条家の実隆は、家柄や官位が下るのは無論、古典学も兼良に及ばないものの、戦乱の世に皇朝文化の伝統を保持し、宮廷にあつて文事の庇護にとつめた貴族として、兼良は祖父良基の志をつぎ、また実隆は兼良の風を伝へてみると見られる。

実隆は兼良ほど、我の烈しい人ではなかつたやうで、却つてそのため、風雅の交りを広くして、文運を下に流す役はつとめた。それはまた、時代の移り変わりでもあつた。

植田は「一条家の関白兼良にくらべて、西三条家の実隆は、家柄や官位が下るのは無論、古典学も兼良に及ばない」として、宗祇の場合と同様、兼良に対する実隆を低く見るような語り方をしていもの、「実隆は兼良ほど、我の烈しい人ではなかつたやうで、却つてそのため、風雅の交りを広くして、文運を下に流す役はつとめた」と語っており、ここでも文化人として以上に、文化の伝播者としての実隆像を強調しているのである。

植田は、「鎌倉に武士の文化が興つてあつたのに、室町には幕府が京に帰つて、平安王朝の文化の模倣、言はば文芸復興、文化の公武合体を招いた」とし、その中心には「源氏物語」があつたと語る。さらに、「源氏」が「至上無二の文本と仰がれるやうになつたのは、室町時代である」とし、「必条の教養や趣味といふ以上に、精神や生活を隷属させた」とした上で、実隆をそうした「室町の源氏風なもの

の典型の一人」であるとみなしていた。

植田はまた、実隆が書写した「源氏物語」が、室町という一時代を創造したと評価し、「実隆の源氏物語が東海道を下つて、江戸時代の国学者の勤皇を東海道に生み、明治の皇政の都が東海道を遷つたと言つても、牽強附会ではなからう」と考えている。つまり、植田は実隆を室町時代だけではなく、それ以降の時代にまで影響を及ぼした、偉大な文化の伝播者とみなしているのである。

また、植田は実隆の古典研究者としての一面を語っていない。一方、森末義彰『東山時代とその文化』（昭和一七年九月、秋津書房）には次のような記述がある。

三条西実隆は、宗祇の講説を聞いてから、自らも深くこれを研究し、人々のためにもしばしば伊勢物語を講釈した。船橋宣賢の「伊勢物語惟清抄」は、この実隆の講説を聴いて記したものである。その他実隆の講説は子公条にも伝へられて大きな影響を次代にのこしてある。実隆はまた人々のもとに於て、伊勢物語を書写すること実に十数回に及んだ。天福本伊勢物語がひろく流布を見たのは、その功の一半は実隆にあつたといつてもよいであらう。こののち伊勢物語の研究は、近世に入り細川幽齋の「伊勢物語闕疑抄」によつて集大成されるのであるが、闕疑抄の根底をなすものは、実に兼良・宗祇・実隆らの研究の成果であつた。この点に於いても、東山時代に於ける、この三者が伊勢物語研究史上にのこした功績には、大いに見るべきものがあつたわけである。

（森末義彰『東山時代とその文化』）

この引用からも分かるように、実隆には兼良や宗祇に劣らない優れた「伊勢物語」「源氏物語」研究者としての一面があるのである。しかし、植田が古典研究者としての実隆について、言及することはまったくない。こうした点にも、川端の、実隆を文化の伝播者に位置付けようとする操作が認められるのである。

以上見てきたように、川端は、実隆を優れた芸術家である宗祇と比較し、彼の文化の伝播者としての一面以外を削除することで、偉大な文化の伝播者としての実隆像を、はっきりと浮かび上がらせたのである。そうなると、気になるのは、川端がこうまでして文化の伝播者としての実隆像を、確立しようとした理由である。それは室町という時代の性格を、実隆について語ることで明らかにするためであつた。

当時の研究において、室町時代は、文化の伝播力がかつてなく高まつた時代とみなされていた。

勢力の downward ともに、文化の普及 downward といふ事も、特に注意すべき此の時代の現象である（略）応仁の大乱の前後になると日蓮宗、一向宗の如きは此の混乱の時代に旧教会の迫害から殆んど全く解放せられて、土民の間に其教化を伸べることができた。いひかへれば、此の時代に於いて、始めて下層社会は宗教に生きたのだといへやう。之れと同時に、学問も普及 downward した。古来我国の良教員は、宗教家であつたから、宗教の普及 downward は、

同時に学問文学普及であった。遊行僧の地方の遊行化導・真宗・曹洞宗の僧侶の地方布教の如き、必ず学問の地方普及に間接に功があつた。而して此の混乱の時代に於ける学問教育の普及については、外に次ぎの如き重要視すべき原因があつた。中央の混乱は、勢ひ公卿を地方に駆逐した。又此の混乱から、歌文を業とする者が現はれて絶えず回国して、学問、文学を伝へた。

(長沼賢海『大日本史講座 第五卷 室町時代史』)

こうした時代観は、原の『東山時代に於ける一縉紳の生活』においても、「足利時代の其既往に比して異り、従ひて藤原時代と大に同じからざる点は、文明の伝播力の強弱の差である」と語られており、また長沼賢海『大日本史講座 第五卷 室町時代史』(昭和九年二月、雄山閣)においても、「文化の普及下向」という言葉で同じことが語られている。

このように、当時室町時代は、文化の伝播時代としてみなされており、植田がこうした時代観を共有していたことは、「室町のこの時分は、文物が凋落衰微の奈落といふことになつてゐるが、一方から見ると、文芸復興のやうだし、文化の遍歴時代で、東海道はなかなかおもしろかつたんだよ」と、絹子に語っていたことから分かる。

川端は、植田に偉大な文化の伝播者としての実隆について語らせることで、文化の伝播時代としての室町という時代像を、描きたかつたのではないだろうか。そして、室町時代の文化の伝播を、文化を保存・継承しようとする中世全体の、文化的営為の一環と見なす時、第二章で指摘した、文化が保存・継承される時代としての中世

が、読者の眼前に実相を持って立ち上がってくるのである。

## おわりに

「東海道」という作品の価値は、文化の保存・継承といった営為を、作品のオリジナリティを重視する近代的な、〈小説〉という枠組みの中で表現しようと試みたところにある。

植田は、「原形の動かぬ」「地質学の地層や化石」である「岩石の書」に対して、「伊勢物語」などの「人間の書」の価値は、「人々の心で書き改められ、書き加へられて来たところに」存在するとし、「さういふことの最早ないのは、近代の不幸のやうにも思はれる」と語っている。また、大磯の鳴立庵を訪れた際に、保存・継承を主とする、中世の文化的営為と近代文学との本質的違いについて、以下のことを語っている。

「鳴立庵が代々あるのも、まあ、歌舞伎役者の襲名や、お稽古ごとの名取りみたいなもんだよ。戸籍の名前を代へるんだつて、先代を襲名するのなら、特別に簡単な届けですむらしいからね。」

と、植田は絹子に言った。

しかし、植田の領分の文学では、このやうな習はしが、実は最も少いのだつた。文学の本質に、これと反するところが最も多しめらだつた。

日本の芸道一般から言ふと、古今伝授や庵号継承など、不審

がるのがかしいのだった。

先人の足跡に従って、名所古蹟にお百度を踏むだけで、無名の山川をみだりに歩かぬのが、日本の芸の修行の道だし、精神の道しるべだった。

さうして、これは厳しく深かった。

川端は、植田のような、作品のオリジナリティを重視し、新たな作品を創出することにのみ価値を見出す、近代的な文学観から外れた視点から、文化の在り方を見つめようとする人物の目を通して、「東海道」で文化が保存・継承される時代としての、中世を描くことで、近代的な視点からは見ることでできない、文化への見方をしようとしていたのである。「東海道」の後続作品において、川端は文化の保存・継承と、オリジナリティの問題を追及し続けていた。

また、戦後の川端の活動にも、新たな解釈を加えることができる。

川端は「貸本店」〔日本読書新聞〕第三三二号、昭和二〇年一月二〇日〕において、戦中の鎌倉文庫の経営が「食ふため」であると同時に、「文学者の仕事としての貸本店であつたことも無論である」と述べ、「千名二千名の会員を擁し、幾万の人々に文学を与へて来た」ことを回想しているが、この鎌倉文庫の経営にも、「東海道」と同様文化の保存・継承の意識が働いていた。鎌倉文庫を「敗戦時に唯一一つ開かれてゐた美しい心の窓」と称し、「本のあること日本一の店だと私は言つてゐた。平和時代と変らぬ書物の溢れてゐた店は、事実国内にここ一つしかなかつただらう」とする、川端の言葉には、文化の保存・継承の場として、立派に機能した鎌倉文庫への誇りが

認められるのである。

鎌倉文庫は戦争中の五月に開設した。私共が店番をし、手車やリユック・サックで本を運搬するのを見て、阿呆らしいこと、勿体ないことといつてくれた人もあつたが、これで食ふんだものなんでもないとは私は答へた。事実であつた。昨年度の私の原稿料は八百円代、印税はなく、従つて今年は総合所得税を払つてゐない。食ふためのと端的に答へたのも偽りでなかつた。しかし文学者の仕事としての貸本店であつたことも無論である。発表も発行も抑圧されてゐた文学作品も、貸本店として読まれることは禁止されてはゐなかつた。小さい店に過ぎないが、千名二千名の会員を擁し、幾万の人々に文学を与へて来たのである。

（川端康成「貸本店」）

今後は、鎌倉文庫の経営、国際ペンクラブへの参加、日本近代文学館の設立などの活動と、川端が「東海道」においてその価値を主張した、保存・継承という形の文化的営為とのかかわりについて、先行研究に対する再考と共に考察を進めたい。

注

（１）森本稜「戦時下の川端康成——その古典受容を中心として——」

〔国語国文論集 第七号〕昭和五二年八月、安田女子大学日本文学科）及び杉井和子「住吉」連作における〈私〉の遍歴（『国文学 解釈と鑑賞 別冊 川端康成 旅とふるさと』平成二一年一月、ぎょうせい）

(2) 戦中から戦後にかけての川端の日本観を論じた先行研究は、大別して、古典受容の文化的側面を重視する研究と、ナシヨナリズムの文脈に接続する研究に分かれる。古典受容から論じたものとしては、たとえば羽鳥徹哉「戦争時代の川端康成」(『国文学 解釈と鑑賞』昭和五十六年四月号、ぎょうせい)が川端作品に表れた「たをやめぶり」に戦争により抑圧され機械的になりがちな人間性を和らげる働きを見出した。ナシヨナリズムの文脈から論じたものとしては、野寄勉「削除される默契——削除版「過去」について——」(『群系 第一四号』(平成一三年一〇月、群系の会)が、川端は終戦直後の日本人の自堕落で無反省な醜態を作品の上に克明に描いていたと述べている。

※「東海道」本文からの引用は、すべて川端康成『川端康成全集 第二三巻』(昭和五九年八月三版、昭和五六年二月初版発行、新潮社)に拠る。また、傍線はすべて投稿者による。なお、本稿は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム [PMJPS2124] の支援を受けたものである。